

古事記風土記
祝詞附壽詞宣命
高橋氏文日本書記(神代卷)

校

日本文學大系

第一卷

昭和二年七月十八日印刷
昭和二年七月二十一日發行

(非賣品)

日本文學大系

第一卷

編輯者兼
發行者

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

國民圖書株式會社

右代表者

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

中塚榮次郎

印刷者

東京市本所區番場町四番地

井上源之丞

印刷所

東京市本所區番場町四番地

凸版印刷株式會社本所分工場

發行所

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

國民圖書株式會社

電話銀座

七二八三八番
二一八八六番
三六八八六番

振替東京五二二九八番

序

我が國文學各種の一大結集を作らんとする、日本文學大系刊行の計畫は、出版界に於ける近來の壯舉である。從來此の種の叢書は多數刊行されてはゐるが、其の質と量と、共に同日の比ではなく、縦ひ事業として特異のものでなきにせよ、これを遂行するに、人知れぬ苦心と行き届いた用意とを以てし、内容的にも外形的にも、十分に立派なものを提供せんとする意氣込は、やがて本事業の出色の特質であらねばならず、殊にこれが、關東大震災の直後、經濟界が最も混亂を極めた中にあつて計畫せられ、印刷その他の設備が未だ十分に整はざる先に著手されながら、而もこれだけ氣持よい本が、著々と序を追うて刊行されつゝあるところ

に、本事業の眞面目さを看取しなければならぬ。

當時の出版界は、他の諸事業に先んじて復興した形ではあつたが、それは讀書界の飢渴を醫すべき一時的のものによつて殷賑を極めたのみであつて、その現はるゝものは悉く蕪雜な貧弱な、永久性の乏しいもののみであつた。斯かる中にあつて、全然それ等の射利的計畫に同ぜず、堂堂たる抱負を以て、最も組織的に本事業が企圖されたのであるから、これが當時出版界の一驚異となつたのも至當である。

忌憚なく言へば、在來の此の種の叢書には遺憾とする點が少なくなかつた。あるものは一般的に賣れるもののみを集め、あるものは其の要不要を論ぜず集めて徒らに量の多きを誇り、あるものは何等の統一なくして只漫然と纂輯し、又あるものは無責任なる複製の複製であり、あるものは校訂校正に其の杜撰さを露骨に暴露してゐると云つた風である。本

大系本は、これ等先蹤の闕典を仔細に點檢して、どの點からも遺憾のな
いやうに、且永く後代に残す本として、外形的にも能ふ限りの注意を加
へようといふのであるから、事業として大きくもなり、困難の度も増し
たのであるが、それだけ理想的のものになり、非難の尠ないものとなつ
たのである。

本大系本は、第一期事業として、奈良朝より室町末期までの文學を、
第二期事業として、徳川時代の文藝を輯め、續いて第三期には和歌を、
第四期には俳諧を、なほ餘力あれば、更に最近世にまで及んで刊行せんと
するもので、これ等各期の文藝を悉く系統的に組織的に排列すると共に、
その資料を最も依據すべきものに求め、校訂及び校正には最も力を
注ぎ、註釋を加ふべきものには、各專攻の士に依嘱し、又各卷に、前後
の脈絡ある詳密の解題を附する等、あらゆる點に熱情と細心の注意とが

加へられてある。これ等は、苟も書を作らんとする者の、たやすく口にする所ではあるが、それを實際の上に如實に實現することは、決して容易のことでない。在來刊行の類書が、動もすれば其の抱負と背馳せる結果を將來してゐるのを見ても解るであらう。然るに本大系本が、第一期事業すら完了せざる中に、早くも、「大系本」といふ稱呼を以て云ひ囃さるゝに至つたといふことは、即ち其の價值と權威とが一般に廣く認められたからであつて、所謂大系本に取つて、此の上なき名譽といはねばならぬ。

此の大系本刊行の計畫は、中山泰昌君によつて立てられ、國民圖書株式會社の中塚榮次郎君が、財界の不安甚しかつた震災直後にあつて、非常の決心を以てこれが發行を引受けられたのである。而して組織編纂等の方面には、佐伯常麿君が膺られ、中山君はまた、事業の進行と各卷の

校正とに、終始一貫して力を注がれつゝある。而して兩君が、出來うる限り良い本を作らうといふ上の註文は、かなり營業者に失費、犠牲を拂はしめるものであるが、中塚君は快くこれに應ぜらるゝのみならず、印刷、用紙、製本等の技術、材料にも最良のものを擇ばんとして努力し、印刷の如きも、凸版印刷株式會社が印刷機械を輸入するを待ち、全部同社の優秀なる特技に依頼して、その費用の高下を論ぜざる如き、本大系本が、外形的にも優れて良いものが出來た所以として、特に附記しておかねばならぬことである。

斯くて大系本が、第三期第四期に及んで、豫期のごとく完成したならば、こゝに日本文學の一大殿堂が築かれて、容易に他の追隨し得ざる偉容を現出し、永く學界の惠澤となるであらう。予は一日も早く其の完了を俟つものである。

序

昭和二年七月第一卷第二十一回配本の刊行さるゝ時

六

文學博士 上田 萬年 識

序

近來國語國文學に關する研究が盛んになつて、古典の翻刻や豫約出版が續々發表されるといふことは、誠に喜ばしい現象で、これは全く國民が自國の國民性に自覺を持ち、自國の國民精神に深い親しみを持つやうになつた結果といはねばならぬ。そしてその魁をなしたものは、實にわが文學大系である。本大系本は、裝幀、製本、用紙、印刷等の外形に於て成功してゐるばかりでなく、校正嚴密、頭註深切、殊に特筆すべきは各卷が作品の種別、内容の聯絡、製作の年代等によつてそれ／＼排列されてゐて、眞に大系の名に背かざるのみならず、それらの何れもが、定本とするに足るものであるといふことである。例へば、土佐日記が前田

侯爵家祕藏の定家本土佐日記によつて校訂された如き、播磨風土記が三條西伯爵家本を参照された如き、更級日記が御物本更級日記によつて流布本の錯簡を正して、更級日記錯簡考、更級日記新註を著はされた玉井氏によつて擔當された如き、これらはその一斑に過ぎぬのであるが、また以てその全豹を窺ふに足ると思ふ。

今や第一期は殆んど完了に近く、第二期は既に著々刊行されてをり、つゞいて第三期、第四期も計畫されてをる。第一期の完了を祝するともに、將來ますますよき本を學界に提供されんことを希望して止まぬのである。

昭和二年七月

文學博士 關 根 正 直

序

昭和の大御代は年はまだ新しいが、現代史として觀て、既に興味ある事柄に富んでゐる。先づ政事方面には、珍らしい出來事から内閣が更迭し、新に生まれた内閣は、内政に外交に、清新の氣分を漂はしてゐる。その今後の活躍は頗る見ものである。經濟方面には、突如として大波瀾が捲き起り、世界大戰以來の積弊に惱める財界に大刷新を促して居る。その如何に落著するかも、また頗る見ものである。更に文化方面には、出版界の活氣を呈してゐることは素晴らしいもので、未曾有の現象として人を驚かしてゐる。中にも某々全集、何々叢書類の刊行が一齊に發表せられ、殆ど應接に遑のない有様で、さながら陽春三月百花一時に爛漫たるの觀がある。これはかの大震災火災に書籍が多く亡びたのを補充しよう

といふことをはじめとし、その外種々の原因もあらうが、蓋し昭代文化の進展の表現として慶賀すべきことである。然るに、多くの出版物の中には、思想の上からも、紀の上からも、かかるものは無くもがな、寧ろ此の世から消え失せた方がよいと思はれるものもまた、姿を見せて居るものもある。或はこれは明らかに贏利主義のものであらうと氣がつくものもある。かかる中に於て嶄然頭角を見はし、頗る推賞に値するものもまた少なくはないが、國民圖書株式會社の日本文學系の如きは、其の巨璧といふべきである。

そも／＼全集といひ叢書といふ類の編纂は、其の内容が精選せられたるものによつて充實し、其の採録が縦横廣汎である事を第一義とすると共に、また其の編次の體裁に於て、其の校勘の嚴密に於て、編者獨得の手腕に俟つべきものが頗る多い。殊に我が國民文學の叢書としては、漫

然として雑多の書籍を蒐めたものでは慊らない。必ずや之を縦斷して、我が國民性、我が國家的大精神が、一貫して見られるべきものであつてほしい。これは歴史家の立場からして特に希望するのである。そこで、この日本文學大系は、上に述べた諸要素を、大體に於て具備し得たものと信ぜられる。編者の苦心の容易でなかつたことが想はれる。しかのみならず、網羅せられたる各書に就いて、専門大家の詳細なる解説を加へられたる事、口繪插圖を豊富にして、原本の面影をしのばしめ、其の原本のはじめて出た當時を想はしめる事等、用意のまことに周到なるものがある。製本裝飾もまた見事であるが、それは内容の善美なるに比すれば事々しくいふほどでもあるまい。

發行者の計畫に従へば、日本文學大系は、先づ國文學の搖籃期たる奈良時代よりはじめて室町時代に至る間を以て第一期とし、すでにその完

成の期も近づき、江戸時代文學の爛熟期を第二期として昨春より刊行に著手し、更に又和歌俳諧をも網羅して第三期第四期の發表をするさうである。それはこの種の全集ものの性質上、當然の事ではあらうが、またなか／＼の大業であらう。併し予はその完全なる成功を確信するのである。そも／＼大出版の完成は書肆の資力、頒布の方法等にもよるが、最もその事業の中心たる人の、人物如何に繫るところが多いやうである。この日本文學大系の發行者たる中塚榮次郎君は、予は始めて君と會見した時に、忍耐努力の人たることを認めた。その後、列聖全集の大出版に成功せられたのに敬服して、君に寛政重修諸家譜一千五百餘卷の刊行を慫慂した。随分難事業と思うて心配をしたが、やがて成功せられた。是等の事に鑑み、また況んや、本大系の刊行には、君も畢生の事業としてその心血を濺がれると聞いて、其の成功を確信するものである。著作者

自身は言ふに及ばず、出版の業に従ふ者は、利益を擧げんとする外に、常にその出版物が、百千年の後までも如何に大なる影響を、世道人心に與ふるかを忘れてはならない。予は中塚君が一層此の點に留意して、この大事業を完成し、以て昭和聖代の一偉觀とせられむことを切望するのである。

昭和二年七月

文學博士 三 上 參 次

